

不幸なシンデレラ

——『嵐が丘』におけるキャサリンの変容について——

野 口 祐 子

序 論

私たちが *Wuthering Heights* の一代目 Catherine に対して抱くのは、どのような印象だろうか。彼女の幼なじみであり、女中としてその死の床まで仕えた Nelly が、彼女のことを語る時、かなり批判的な発言が目立つ。読者は、主に Nelly の語りを通じて Catherine のことを知るのだが、Catherine を我儘だとも身勝手とも思わず、彼女の心情や身の上に同情できるのではないだろうか。一体あまり好意的と言えない描写をされているにもかかわらず、私たちが Catherine に抱くそのような共感、彼女のどういう所に対して、また何故向けられるのだろうか。

近年、*Wuthering Heights* 批評はますます洗練の度を増してきている。作品が発表された当時とは打って変わって、¹⁾ 昨今の批評はこの小説を積極的に評価し、あらゆる方法を試みて、新たな角度からの解釈を産み出している。

そのような状況下で、とりわけ大きな貢献をしているものの一つがフェミニスト批評であろう。社会と隔絶した世界の物語として読まれることの多かったこの小説を、フェミニスト批評は社会的な文脈から読み解くことによって、あらたな視点を提供したのである。この小論では、その成果を踏まえた上で今一度、一読者として抱く素朴な疑問に立ち返りたいと思う。それは冒頭で提出した、常識的に見て身勝手至極な Catherine や、怪物のような Heathcliff に、何故私たちは共感できるのかという疑問である。この疑問を無視しては、洗練された議論も、理論の為の議論になりかねないだろう。

野性児→シンデレラ的少女→狂女→幽霊。それぞれの定義には疑義が付き纏うが、敢えて単純化すれば、この四態は、物語の中で Catherine が見せる過激な変身を表している。そのそれぞれの変化は、彼女の内なるどのような力、また外からのどのような圧力によって引き起こされたものなのか。Catherine と Heathcliff はしばしば不変の特質の化身として論じられてきた。²⁾ 以下の各章では、彼らを変容の相において捉える。Catherine の変身について、そして Heathcliff はどう変わったのかについて考えることによって、彼らが社会的存在として体現した矛盾、欲望、憧れ、それらによってもたらされる苦悩と葛藤の性質を明らかにしたい。その際に、小説が設定さ

れている19世紀初期、あるいは作者が属した19世紀半ばの英国北部という、特定の社会の状況に限定するのではなく、個人と社会との現代にも通じる葛藤として論じたい。

I. シンデレラへの変身

Catherineについて語るならば、少女時代から始めるのが順当なのかもしれない。しかしここでは、彼女が「シンデレラ」になった時のことから始めよう。

帽子もかぶらず裸足で走り回っていたCatherineが、Thrushcross GrangeからHeightsに戻ってきた時、彼女は巻き毛を美しく垂らし、瀟洒な衣装に身を包んでいた。奔放で天真爛漫な少女は、突如として王子さまの気を引くお嬢様へと変身を遂げていたのだ。

まずCatherineの変身の起点となる出来事に注目しよう。Grangeの犬に足を噛まれたCatherineは、屋敷の中に連れていかれる。次の引用は、Heathcliffが窓の外から覗き見たその時の様子を、Nellyに報告している部分である。

“She sat on the sofa quietly. ...she was a young lady and they made a distinction between her treatment and mine. Then the woman servant brought a basin of warm water, and washed her feet; and Mr. Linton mixed a tumbler of negus, and Isabella emptied a plateful of cakes into her lap, and Edgar stood gaping at a distance. Afterwards, they dried and combed her beautiful hair, and gave her a pair of enormous slippers, and wheeled her to the fire, and I left her, as merry as she could be....” (Ch.VI, pp.39-40)³⁾

この情景は、まるで儀式のようだ。⁴⁾ 足を洗われ髪をとかさされ、贅沢な品を体内に入れ、足に履くこの儀式は、Catherineを〈女〉として地主階級の文化の内に取り込む、言わば‘initiation’である。男の欲望と所有の対象としての女、その対象となることに自分の存在価値を賭ける女、社会によってそのような縛られた女を〈女〉と表すならば、Catherineが経験したこの儀式は、まさしくそのような〈女〉への変身を導くものであった。

勿論ここでCatherineは、自ら進んで〈女〉になろうとしているのではない。たくましく走り回っていた彼女は、文化の門番というべき“skulker”(「こそこそ隠れる者」)という名の犬によって、陰険なやり方で本来の力を奪われたと言える。それがこの後、どんな大きな意味を持つかも知らずに、CatherineはHeathcliffから引き離され、子供らしく無邪気に介抱されるがままになっている。

しかし、この場面が窓の外にいるHeathcliffの視点を使って書かれているために、読者にとっては、怪我を介抱されるという一見何気ない行為の持つ、決定的な意味が浮かび上がる。窓枠は、Heathcliffを締め出しCatherineを内に取り込む、文化の境界線を示す。その位置から中を覗き

見ることによって、室内の光景は額縁の中の絵のように精神的距離を置いて眺められる。読者はHeathcliffと同じ位置に立つことによって、その文化が専有的で、それに属さないものを疎外するのだということを思い知り、Catherineの身に起こっていることの重大さを悟るのである。

ここで私は*Jane Eyre*の一場面を思い起こさずにいられない。RochesterがThornfieldの館に戻った夜、外出から帰ったJaneが廊下から主人のいる食堂を覗き見る場面である。

This ruddy shine issued from the great dining-room, whose two-leaved door stood open, and showed a genial fire in the grate, glancing on marble hearth and brass fireirons, and revealing purple draperies and polished furniture, in the most pleasant radiance. It revealed, too, a group near the mantelpiece: I had scarcely caught it, and scarcely become aware of a cheerful mingling of voices, amongst which I seemed to distinguish the tones of Adèl, when the door closed.⁵⁾

Janeの眼差しには、明るく暖かい部屋の内に息づく地主階級の文化への憧れが感じられる。Janeの前にドアが閉じられると、彼女は疎外感と同時に、中に入りたいという欲望を抱く。Charlotte Brontëによる、もう一つの屈折したシンデレラ物語と言える*Jane Eyre*の主人公は、その部屋をあくまでも欲望の眼差しで見ている。CatherineとHeathcliffが窓の外から覗いた部屋も、同様に贅を尽くした美と温もりに満ちていた。しかしながらその部屋は、彼らの目にははじめは天国のように見えても、子犬の所有権で喧嘩しているEdgarとIsabellaよりも、外にいる自分たちの方がずっと幸せだと思わせる場所であった。外見の美しさの内に潜むものをHeathcliffは見破る。窓の内側の世界に、束縛と抑圧と、所有し疎外する力の存在を感じているのだ。

しかしCatherineは「天国」に取り込まれてしまった。5週間の滞在の間に、Linton家は親切にも彼女に、地主階級の文化の内に生きていくための術を教育してやった。こうしてCatherineは、シンデレラ的変身を遂げて家に戻るのだ。

〈女〉として生きるための教育は〈女〉としての幸せを運ぶはずであった。その筋書き通りに彼女はEdgarと結婚することになる。しかしシンデレラのように選ばれ、求められ、愛される受け身の生の中に、彼女は自らの幸せを見出せない。Linton家が施した教育がCatherineの内に分裂を引き起こしたからだ。その分裂は、彼女がHeightsに戻った時の様子に既に明らかである。

...instead of a wild, hatless little savage jumping into the house, and rushing to squeeze us all breathless, there alighted from a handsome black pony a very dignified person with brown ringlets falling from the cover of a feathered beaver, and a long cloth habit which she was obliged to hold up with both hands that she might sail in. (Ch.VII, p.40)

思うがままに振る舞う少女は、Grangeに行くまではHeightsで兄夫婦に邪険な扱いを受けていたのだが、そんなことでいじけたりせず、荒野を走り回った後で家に飛び込んで来て、家の者たちを息が止まるほど抱きしめていた。そんな彼女の行動は、何にも束縛されない意志と愛情の表現であった。だが今やそのCatherineは、Nellyが小麦粉だらけなのを見ると、抱きしめるのをやめしてしまう。このちょっとした振舞いに端的に現れているごとく、彼女の行動は美しい衣装に象徴された地主階級の文化の規制を受けるのである。

行動ばかりではない。彼女がHeathcliffを見る目にも変化が生じる。

“Why, how very black and cross you look! and how — how funny and grim! But that’s because I’m used to Edgar and Isabella Linton. Well, Heathcliff, have you forgotten me?” (Ch.VII, p.41)

そしてCatherineは、ただHeathcliffが“odd”に見えただけで、手と顔さえ洗えば大丈夫と言うのだが、この無邪気な言葉は、彼女が以前と同じ目でHeathcliffを見られなくなっていることを露呈している。以前の相手のことを忘れたのは実はCatherineの方なのだ。

Catherineの眼差しの変化は、Edgarとの結婚を考える際に決定的な影響を及ぼす。Heathcliffの存在が自分に如何に大きな意味を持っているか分かっているはずなのに、彼女は社会の物差しを持ち出して、“It would degrade me to marry Heathcliff now” (Ch.IX, p.62)と言い、混乱しながらも結婚制度という社会の枠組みに取り込まれることを選ぶ。〈女〉としての生き方に身を任せるのである。

ただしCatherineは、教え込まれた通りに、男性の所有の対象である〈女〉として生きることには納得していたわけではない。彼女はEdgarの求婚を受け入れた夜、Nellyにこう語る。

“I was only going to say that heaven did not seem to be my home; and I broke my heart with weeping to come back to earth; and the angels were so angry that they flung me out, into the middle of the heath on the top of Wuthering Heights; where I woke sobbing for joy. That will do to explain my secret, as well as the other. I’ve no more business to marry Edgar Linton than I have to be in heaven....” (Ch.IX, p.62)

ここでCatherineの夢に出てくる“heaven”は、初めてGrangeの客間を覗いた時に見た“heaven”と結びつくだろう。即ち彼女の夢の中の天国はLinton家が代表する世界であり、“angels”はその住人たちなのだ。それはCatherine自身が夢の解釈において、“heaven”をEdgarとの結婚と結びつけて捉えていることから明らかだ。だからCatherineには、シンデレラ的変身物語の筋書き通り、Edgarと結婚して彼らの天国の正当な居住権を得ることが、実は自分本来の居場所を捨

てることになるのだ、ということが分かっている。

だが確実に大人の女へと変化していく肉体を、美しい衣装が表面化させた今、自らを〈女〉として客体化して見る習慣を彼女は身につけた。本来の自己と客体化された自己。このような分裂を抱えたCatherineは、もはやGrangeの中に連れ込まれる前の自分に戻ることはできないのである。

これは言わばCatherineの楽園喪失の物語である。⁶⁾ Wuthering Heightsという、傍目からは楽園とは程遠い環境に育っていても、Heathcliffと二人きりでいるだけで充足していた楽園。男と女であることを意識せずに箱型寝台の中で寄り添って眠れた楽園。もうその場所と時間へと戻ることはできない。それらはただ喪失を意識させるものとなるだろう。

ただしHeights自体が楽園と呼べるような理想的な場所なのではない。たとえばQ.D.Leavisが提示するような、原初的な力を持ったHeightsに対する、その文明化し軟弱化した形態としてのGrangeという図式はここでは成立しない。⁷⁾ 楽園とは、社会性を帯びる以前のCatherineの存在のあり様そのものなのだ。それは未だ彼女を欲望と所有の対象と見做すことのないHeathcliffと、無邪気に共にいることができた状態のことであり、自分がただ自分でいられた年月のことである。いわばLinton家はCatherineにとって知恵の木であった。美しく香るその果実を食べれば、Linton家が代表する天国に入ることが保証されている。それを齧ったCatherineは、自らの性と肉体を社会の目で見える能力を獲得し、それと引き替えに本来の居場所を失った者の喪失感と楽園回復への渴望に苛まれることになる。

II. Catherineの分裂

Catherineの狂乱、そして彼女の幽霊の意味は、一にこの楽園喪失前の場所と時間を求める心の表れと理解されよう。だが、それらについて論じる前に、ここで改めてCatherineの分裂の様態を詳しく見てみよう。

まず、小説の冒頭に示される謎かけに触れておく必要がある。他でもない、LockwoodがHeightsの箱型寝台の窓際に見つけた落書きのことである。三様の名前が全てCatherineの手によって書かれたものかどうかは定かでない。しかしそれらは、Catherineという存在が、父から与えられた姓であるEarnshaw、そしてHeathcliff、Lintonという、男との結びつきでしか規定されなくなったことを物語っている。しかも三様の名前が書き散らされているという状況から、Catherineという名はそのどれに結びつけられるべきか分からない、つまり自分を繋ぎ止めるべき所が分からなくなった、彼女の精神の動揺を象徴していると考えられる。Lockwoodの夢の中で、“the air swarmed with Catherine’s”(Ch.Ⅲ, p.15)と感知された混乱は、Catherine自身の混乱でもあったわけだ。

この名前の謎については、Kermodeが、Catherineの姓の変化を物語の進行と重ね合わせて論じている。⁸⁾ Lockwoodが名を挙げる順序通りに、母娘二人のCatherineの姓が対称的に変化しな

がら、物語が整然と展開すると論じて、秩序を強調する。それは確かに理路整然とした解釈なのだが、そこではその落書きが刻まれた動機や、書き散らされているという状況についての考察がない。読者としては、Catherineの苗字の変化と物語の整合性に感心する前に、まず名前が作り出す混沌状態に反応すべきではないだろうか。むしろここでは、秩序よりも混乱をこそ読み取らねばなるまい。これらの名前の洪水は、黙しながら雄弁にCatherineの分裂状態について私たちに語りかけている。

このCatherineの名前の混乱は、Heathcliffの場合と対照的である。彼は素姓も分からぬまま、単にHeathcliffと呼ばれ、苗字を持たない。もともと彼は家父長制社会の最小単位であるどの家にも属さないのである。前にMr.が付く以前のHeathcliffの名前のあり方は、彼が孤独であると同時に、制度による束縛からも、Catherineが陥ったアイデンティティの混乱からも自由であることを物語っている。Catherineを変身させるきっかけとなったあの事件の日、Grangeの召使によって“out-and-outer”(p.38)と呼ばれた彼は、いかなる帰属意識も持たないのである。

そんな彼はCatherineさえ傍に居てくれれば、自己完結した生を全うできるはずだった。Catherineはシンデレラ的変身によって元の自分を失い、Heathcliffは彼女を失った。だからCatherineが元に戻ることができれば、Heathcliffも彼女を取り戻せるだろう。

しかしそれは、Catherineが〈女〉として生きる限り不可能である。彼女は自らの分裂を“*What were the use of my creation if I were entirely contained here?*”と表現する。そして次の有名な語りが現れる。

If all else perished, and *he* remained, I should still continue to be; and, if all else remained, and he were annihilated, the Universe would turn to a mighty stranger. I should not seem a part of it. (Ch.IX, p.64)

秋に色変わる木の葉と、その土中深くにある巖の比喩へと続く、このCatherineの言葉に明らかのように、Edgarへの愛がはかないものであること、Heathcliffへの愛は必要かつ永遠のものであることが彼女にははっきりと分かっている。なのに何故、Edgarと結婚しようとするのか。彼女の内部分裂が、ここでは魂と肉体の分裂として捉えられている。

Catherineは〈女〉としてEdgarと結婚するのが順当だと考える。しかし彼女の魂は元のままにHeathcliffとの二人きりの樂園を希求している。だから引用冒頭にあるように、彼女は自分の全存在が肉体の内に閉じこめられているとは思いたくないのだ。その肉体は〈女〉のものだから。

「Heathcliffとの一体性」は、Catherineが「〈女〉になる」ことで失われたのだから、その両立を実現することは、所詮不可能なのだ。しかるに彼女はそれを実現しようとする。その意志は、外見上はEdgarとHeathcliffの両者を自分に繋ぎ止めておこうとする、利己的と見做されるような行動となって表れる。そのためにCatherineはしばしば身勝手な女と評されてきた。しかし彼女はそうすることによって、〈女〉としての自分と、そのような規定を受ける前の自分の両

方を肯定しようとするのだ。この行動が胎む矛盾は、三者の間の激しい葛藤となって噴出し、Catherineの精神を破綻へと追い込んでいく。

Ⅲ. Catherine 狂乱

CatherineはEdgarに愛されて暮らす限りは、〈女〉として生きていればよかったので、一見何の波乱もない日々を送る。しかしNellyの語りから垣間見えるのは、以前の生命力を失ったCatherineの姿である。

Catherine had seasons of gloom and silence, now and then: they were respected with sympathizing silence by her husband, who ascribed them to an alteration in her constitution, produced by her perilous illness, as she was never subject to depression of spirits before. (Ch.X, p.71)

彼女が塞ぎ込むのは、勿論Edgarが思っているような体の不調のせいばかりではないだろう。前章で引用したCatherineの言葉にあった“if all else remained, and he were annihilated, the Universe would turn to a mighty stranger. I should not seem a part of it”が思い出される。Heathcliffとの楽園を失ったCatherineはLinton家での生活に己が魂の居場所を見つけられないでいるのだ。

Edgarとの結婚生活で、Catherineは腑抜けのような、しかし平穏な生活を送っていた。ところがHeathcliffが三年間の失踪の後に戻ってきた途端、彼女の人生は一変する。元の自分に戻りたいと希求しはじめるのだ。しかし当然のことながら、Edgarはあくまで夫と妻という関係の中でCatherineを理解しようとするから、彼女の失ったものへの渇きなど知る由もない。またHeathcliffも強引に、Catherineの肉体までも取り戻そうとするために、肉体は〈女〉として結婚生活を送っても、かつてのHeathcliffとの一体性を取り戻せると考えるCatherineの意志は彼にも理解されない。こうなると彼女の精神はずたずたに引き裂かれるしかないだろう。

狂気に陥ったCatherineの心は断続的に子供に戻って、Heathcliffと共有した経験を再び生きる。それは、枕を咬みちぎって羽根を辺りに撒き散らす場面から始まるのだが、中の羽根を取り出す行為は、枕という安息をもたらす日常性の被膜を破って、今は文化の内に押し込められてしまったが、かつては自然の中を自由に飛び回っていた鳥たちの残骸を引っ張り出す行為とも取れよう(Ch.XII, pp.94-95)。鳥たちの運命はCatherine自身に重なり、これを起点に彼女の心は過去へとさまよい出す。

そんなCatherineを見て、常識の人であるNellyは散らばった羽根を集めて回り、“Give over with that baby-work!”(p.95)と、窘めるばかりだ。〈女〉の殻を破って外へ出たがっているCatherineに対して、Nellyは言わば文化の秩序の監視人なのである。Nellyの目にはCatherineは

単に子供っぽく振る舞っているにすぎない。だが、そんな判断が全く浅薄であることが、次の瞬間に分かる。Catherineは鏡に映った自分の姿を自分のものと認識できず、Nellyが“*It was yourself, Mrs.Linton*”(p.96)と宥めても、その姿に愕然とするばかりである。一時的に子供に戻ったCatherineは、Linton夫人となった現在の自分を本当の自分として認識できないのだと考えられる。

Catherineは、もう一度Heightsの箱型寝台の中へ戻りたい、そしてLockwoodが小説冒頭で聞いたのと同じ、寝台の外の縦の木を鳴らす風を呼吸したいと激しく訴える。〈女〉として生きていた間、精神の窒息状態に置かれていた者の叫びである。

しかしNellyには、そんなCatherineも“*our fiery Catherine was no better than a wailing child*”(p.96)としか見えない。この“*a wailing child*”はLockwoodの見た泣き叫ぶ子供の幽霊(“*still it wailed, ‘Let me in!’*”Ch.Ⅲ, p.20)と重なる。子供に戻ったCatherineは、失った楽園に帰りたくて、中に入れてと泣くのである。

もはやMrs.Lintonとしては脱け殻同然となったCatherineは、子供の頃ふたりで過ごした箱型寝台こそが自分の本来の居場所であり、そしてそれが象徴するHeathcliffとの一体性こそが自分の本来のあり方なのだと悟る。Grangeという強固な文化の砦の中で、〈女〉の殻を破ってこの認識に至るには、狂気をもってするしかなかったのだ。次のCatherineの言葉からは、初めてGrangeに行った時からの歳月、つまり〈女〉として生きた7年間の、もはや自分の生きた時間として認識できなくなったことが、ひしひしと伝わる。

...most strangely, the whole last seven years of my life grew a blank! I did not recall that they had been at all. I was a child; my father was just buried, and my misery arose from the separation that Hindley had ordered between me and Heathcliff. I was laid alone, for the first time....(Ch.XII, p.97)

過去の7年間と言えば、起点はEdgarとの結婚ではなく、Hindleyが妻を連れて戻ってきて、Heathcliffを下男の地位に貶め、そしてCatherineがGrangeにはじめて入った年である。Heathcliffから引き離されたことが、自分の人生で如何に大きな意味を持っていたのか、Catherineはここにはっきりと悟った。箱型寝台の持つ象徴的な意味は今や歴然としている。その中に入ったLockwoodが、楽園を乱す者として恐怖と共に追い出されたことも、そしてHeathcliffがその中で窓を開けたまま恍惚とした表情で死んでいたことも、これによって理解できよう。Hindleyは二人を引き離し、Linton家のCatherine教育に加担し、共謀して〈女〉として生きるように仕向けたのである。

だから、上の引用に続く次の言葉が、受動態で語られているからと言って、それを無責任と受け取っては、Catherineも浮かばれまい。

But, supposing at twelve years old, I had been wrenched from the Heights, and every early association, and my all in all, as Heathcliff was at that time, and been converted at a stroke into Mrs. Linton, the lady of Thrushcross Grange, and the wife of a stranger; an exile, and outcast, thenceforth, from what had been my world. You may fancy a glimpse of the abyss where I grovelled! (Ch.XII, p.97)

錯乱状態の中でCatherineは、12歳の時、自分がシンデレラへと変身させられたことを悟る。あの儀式によって彼女はHeathcliffから暴力的に引き離され(“been wrenched”), 魔法の杖の一振りのように(“at a stroke”), 〈女〉へと変身させられたことを思い知る。それは、それまでの自己を否定されるような(“been converted”)変身であった。あの時以前、自分は自分であった。そしてHeathcliffがその存在を共有していた。ところが、あの儀式以来、本来の自分を見失うと同時に、Heathcliffも見失ったのだ。それゆえGrangeの奥様というアイデンティティも、美しい衣装のように体の表面にまとわりついて、精神の自由な動きを妨げるものにすぎない。以降の自分を“an exile, and outcast”と感じ、以降の7年間を“a blank”と感じるのも無理はない。

ここに至って、Nellyの語り伝えることのなかったCatherineの“abyss”が見えてくる。そしてGrangeの心地よい空間とEdgarの優しさが覆い隠していたものが何であったかが分かる。いや、Catherineの態度が理不尽に見えるほどに、Edgar自身は慈愛に満ちた人物だ。しかしお屋敷の主人とその妻という関係が、家父長制社会の抑圧機構として働き、Catherine本来の生命力を奪ったのも確かなのだ。

それをHeathcliffは鋭く見抜いている。彼がEdgarのCatherineへの愛を揶揄する際に用いる比喻は、Catherineが二人への愛の違いを語った時に用いた比喻と符合する。

He might as well plant an oak in a flowerpot, and expect it to thrive, as imagine he can restore her to vigour in the soil of his shallow cares! (Ch.XIV, p.119)

しかして彼女は〈女〉として生きるには地上の天国であるGrangeで、地獄の底を這い回り、弱々しく朽ちていかざるを得なかった。

I wish I were out of doors — I wish I were a girl again, half savage, and hardy, and free; and laughing at injuries, not maddening under them! Why am I so changed? why does my blood rush into a hell of tumult at a few words? I'm sure I should be myself were I once among the heather on those hills. (Ch.XII, p.97)

〈女〉になる前の自分に戻りたいと願うCatherineは、Grangeの外になら元の自分を見出すことができるかも知れないと、ヒースの丘に憧れる。そんな彼女は、自分を規定する〈女〉の肉体を

脱ぎ捨ててまでも、Edgarの天国から逃れたいと欲する（“What you touch at present, you may have; but my soul will be on that hilltop before you lay hands on me again” p. 99）。ここで、ヒースの丘、その上に建つ嵐が丘の家は、単に地理的な場所ではなく、Catherineが過去の自分を蘇らせるために祈念する空間としてある。そして、それらの空間は、後にCatherineの願いどおり、彼女の霊を宿す場所となるのである。

IV. 楽園の回復を求めて

Catherineが亡くなった翌朝、後に残されたHeathcliffは彼女と同じく“abyss”という語を使って自分の苦しみを表現する。

Be with me always — take any form — drive me mad! only *do not* leave me in this abyss, where I cannot find you! (Ch.XVI, p.129)

ふたりとも、お互いを失った魂の空虚を“abyss”と呼んでいる。しかしそれをもたらした原因が異なるゆえに、そこから抜け出す方法もまた違ってくるのだ。

前章で考察したように、Catherineが狂気に追い込まれたのは〈女〉としての生と、元の自分を取り戻したいという欲求の間に引き裂かれたためであった。彼女にとって肉体は、もはや生を謳歌するものではなく、社会的に規制される外皮にすぎなくなった（“the thing that irks me most is this shattered prison, after all. I’m tired, tired of being enclosed here.” Ch.XV, p.124）。Catherineが“abyss”から抜け出すために採った方法は、自分を縛る〈女〉としての肉体を脱ぎ捨て、幽鬼と化す、という過激な方法であった。⁹⁾ 死ぬ前の予言どおり、彼女はまるで鬼ごっこのように、Heathcliffを翻弄することになる。

“I’ll not lie there by myself; they may bury me twelve feet deep, and throw the church down over me, but I won’t rest till you are with me. I never will!” ...

“...Find a way, then! not through that Kirkyard. You are slow! Be content, you always followed me!” (Ch.XII, p.98)

この謎かけのような予言には、Catherineが幽鬼的存在になることによって、再び何の制約も受けないでHeathcliffに対して力を持ちたいという願いが込められている。

Heathcliffの方はどうだろうか。死を前にしたCatherineに対して彼は“Because misery, and degradation, and death, and nothing that God or Satan could inflict would have parted us, *you*, of your own will, did it.”(Ch.XV, p.125)と訴える。HeathcliffにはCatherineの分裂が理解できない。外部からのどんな力もふたりを引き裂くことはできないはずだと信じている

から、Catherineは自分の意志で彼を捨てたとしか考えられない。彼が今うごめいている“abyss”は、あくまでもCatherineを失った喪失の苦しみである。だから彼女のように精神的に引き裂かれ、破綻をきたすこともない。それゆえ彼は、この世でCatherineを取り戻したいという欲望に駆られて生き長らえる一方で、力強い生のエネルギーを復讐に費やそうとする。

Heathcliffは18年間も彼の“abyss”から抜け出せなかった。それは彼が目に見える形を取った、つまり肉体性を備えたCatherineを取り戻すことに固執したからだと言える。そもそもCatherineの死の直後から、彼はCatherineの肉体にこだわった。棺に納められたCatherineの胸のロケットからEdgarの髪を取り出し、自分の髪を代わりに入れるという行為は、恋人への変わらぬ愛を誓う何とも情熱的な行為である。しかしそんな行為はCatherineにとっては見当違いも甚だしいものだ。髪の一束を捧げることで、二人が一つになりたいという思いに浸るなどというのは、Catherineが求める合一とは全く次元の異なるものである。その点でHeathcliffはEdgarと同様であり、Nellyがこの二人の男の髪を結わえてCatherineのロケットに戻したのは、単に三角関係を示す以上に示唆的である。

その後もHeathcliffは、彼の“abyss”から抜け出すために見当違いの試みを重ねる羽目になる。彼女が埋葬された夜には、その墓を暴きにかかり、Edgarが埋葬された日にもCatherineの棺を開けて、その姿が変わっていないのを見て喜ぶ。Catherineが、こんな脱け殻はEdgarにくれてやると言い放ったその肉体を、Heathcliffは再び胸に抱くことを願った。

つまりCatherineとHeathcliffは、楽園を回復するために望んだものが食い違っていたのだ。何故そんな食い違いが起こったのか。Heathcliffは、金と地主階級の権力を手に入れて、思い通りに復讐を実現していく。かつて自分を虐待し、Catherineを自分からもぎ取った力を奪取して自由に行使することによって、楽園を取り戻そうとする。Edgarの妹Isabellaと結婚し、虐待するのは、妻を夫の所有物と見做す家父長制に加担する行為である。Catherineが求めているのは、そんな力ではないことも、ましてや彼女を内部分裂させたのが、正にHeathcliffが復讐の為に行使している家父長制社会の力であることも、彼には理解できない。

II章で触れたCatherineの名前の混乱とは対照的に、Heathcliffは自分の名を臨機応変に使う。家出した後、舞い戻ってくると、今度はそれを姓として用いる。彼の子はLinton Heathcliffと名付けられ、憎むべきLinton家との繋がりを残しつつ、彼に属することが明確化される。そしてHeathcliffは、その子に父親の特権を乱用するのである。ただし皮肉なことに、この“Heathcliff”の名から姓への変化は、その名で呼ばれる男の精神が、自ら手中に収めた家父長制の権力によって呪縛されるという変化を導くのだ。

復讐のために暴虐の限りを尽くしている間、Heathcliffの肉体は力とはなっても牢獄ではなかった。だからCatherineのようにそれを脱ぎ捨てねばならなくなるまで追い詰められることもない。何も彼が彼自身であることを脅かすものはない。Heathcliffが不変の性質を保つ人物として論じられる事が多いのは、この為でもあろう。しかし所有欲に駆られ、権力をほしいままにする彼は、逆説的に家父長制という牢獄に囚われの身となったのではないだろうか。そう、彼もまた元の自

己を失った者と化したのだ。

“The entire world is a dreadful collection of memoranda that she did exist, and that I have lost her!” (Ch.XXXIII, p.245) — これは喪失感が悲痛な叫びとなって、胸に迫る表現である。しかし彼にはCatherineが失ったものが分からない。彼にとってはCatherineが死んだ時が彼女を失った時なのだ。そんなHeathcliffには、もう一度楽園に戻るべく、〈女〉としての肉体を脱ぎ捨てて子供の姿となった彼女の幽霊を見ることはできない。彼も復讐に心奪われるのをやめて、元の自己、つまり家父長としての自己ではなく根なし草としての自己でCatherineと向き合うのでなければ、彼女を再び見いだすことはできないだろう。

V. 幽鬼の恋人たち

狂乱の中でCatherineが叫ぶ“*I'll not lie there by myself...I won't rest till you are with me.*” (p.98) というHeathcliffへの言葉は、安らかに死者として眠ることを拒否する宣言である。彼が自分の傍に来るまで荒野をさまよってやるというのである。

だが物語はCatherineの死後、二代目Catherine（以後Catherine IIと表記）を中心に展開し、およそ90ページの間、Catherineの亡霊はその存在を意識されない。ところが第29章において、Heathcliffがその間ずっとCatherineの存在を感じながら、姿を見ることができなかったことをNellyに告白する。これによって、Heathcliffの復讐が劇的展開を見せ、Catherine IIの成長、Heightsでの幽閉、そしてHaretonとの恋愛の物語が進行している間も、常にその背後にCatherineの楽園回復への物語が存在していたことが分かる。

二人のCatherineは好対照である。Catherine IIはLinton家の娘という自己規定に何ら違和感を覚える必要なく、良家のお嬢様として育った。〈女〉となる上で母が味わった分裂を経る必要がなかった。そんな彼女の異性への反応は極めて常識的な範囲内に留まっている。Linton Heathcliffに対する子供っぽい同情もそうだし、軟禁されているHeightsの中で、少しずつHaretonの気を惹こうとする時、その近づき方には少女らしい愛くるしさもあるが、同時に自分の武器を心得て男を誘惑する女の媚態をも示す。そのような過程を経て結婚に至るCatherine IIとHaretonは、Linton家の財産と文化を受け継ぎ、Earnshaw家の正統な後継者となり、また後継者を生み出していくにふさわしい。

物語は、社会の中ではこのような愛の形しか実現され得ないことを示している。Heathcliffの復讐を挫くことになるこの現世的愛は、未来に希望を与えるものとして描かれている。それは両家が存続し、社会秩序が守られることを保証する愛である。

若い世代のこのような愛の形にCatherineとHeathcliffの反社会的、非現世的な愛が対置される。もとよりヴィクトリア朝に書かれたこの小説で妊娠が生々しく取り上げられることはないが、CatherineはEdgarと結婚しても、妊娠・出産に抵抗していたと考えられる。彼女が自室に閉じ籠もって食べることを拒否するのは、妊娠と母性の拒否の兆候とも受け取れる。妻・母という規

定から逃れ、自ら時間を超えようとしたCatherineは、死によって日常世界を捨てるしかなかった。

第二世代の物語が小説全体に対して、構造上どのような関係にあるのかという議論においては、しばしば第二世代による秩序の回復が強調される。¹⁰⁾ しかしCatherineとHeathcliffが幽鬼と化して存続することにも物語の力点は置かれているのであり、¹¹⁾ 全てがごちんまりと収まったかに見える日常世界とは別個の世界の存在を暗示するのである。

物語の終わり近く、荒野に佇むふたりの幽霊が羊飼いの少年によって目撃される。またJosephもHeightsの窓から顔を覗かせているふたりを見る。彼らの証言が真実かどうかは無論証明できない。死者は安らかに眠っているはずだと信じたがるNellyの目にも、物事の上辺しか見ないLockwoodにも、幽霊の姿は見えない。最後に三人の墓の前に立ったLockwoodは、穏やかな空と、花々の間を飛び交う蛾たちを目にし、草をなでる微風を耳にして、そのように平和な大地に横たわる者たちの眠りが穏やかでないなどと想像できようかと述懐する。

しかし小説の冒頭から絶えず誤った判断を下していたLockwoodに委ねられたこの締め括りの言葉を信用するわけにはいかない。彼の眼前の静謐な情景は、またここでも彼に真実を隠しているだろう。私たちは結末部においてNellyとLockwoodによって支配され手懐けられた物語の隙間にCatherineとHeathcliffの物語を読み取らねばならないのだ。

結 語

人が幽鬼と化すことによって、現世では不可能なことを成就するという、そんな理不尽なことを真面目に考えさせてしまう、これは不思議な小説である。しかしこの幽霊を実在させてしまう離れ業は、幻想性を醸し出すと同時に、日常世界の限界を社会的な問題として顕にしているのだという点を忘れてはならない。Catherineが幽鬼と化したのは、愛の昇華でも何でもない。彼女は〈女〉であらねばならぬことの抑圧から逃れるために死んだ。そしてHeathcliffは、家父長制の権力を握った〈男〉として復讐にうつつを抜かしている間、Catherineを失ったままであった。その執着を捨てて、やっと彼女を取り戻せたのである。ふたりの楽園の喪失は、社会的存在となるためには不可避的なことであった。そしてその回復は、彼らが〈女〉でも〈男〉でもなくなり、社会性を完全に失うことによって実現した。だから彼らが幽鬼と化したことは、社会的な文脈において理解されねばならないのである。

Catherine IIとHaretonの結婚によって*Wuthering Heights*は一見平穏な結末を迎える。それは物語が閉じられるために必要な手続きであろう。しかしそれが、男女の常識的な愛に支えられた平和で文化的な生活の勝利を宣言しているわけではない。もしもその力の勝利によって決着がつくなら、単に世界が悍婦と篡奪者の手から、正統な後継者の手に戻り、秩序が回復されたというにすぎない。しかしCatherineとHeathcliffの物語の発する強烈なエネルギーは、そのような安易な収束を許さない。結末においても全編を吹き荒れた彼らの物語の嵐が未だ消え去ってはい

ないのだと察知される。彼らの姿はそれを見ようとする者には見えるであろう。荒野を自由にさまよう彼らの存在が、社会の是認を受けた生活に対して持つ対立命題としての意味に、私たちは思い至るべきなのである。

註

- 1) 当時の書評での評価については Allott 217-48 参照。
- 2) 典型的な例としては, “children of the storm” (Cecil 102-113), “the daemonic archetype” (Van Ghent 153-70, 特に163-64), “Satanic, irrational, and ‘female’ representation of nature” (Gilbert and Gubar 260-308) 参照。
- 3) Emily Brontë, *Wuthering Heights*, ed. William M. Sale, Jr. and Richard J. Dunn (3rd ed., New York: Norton, 1990). 以降の引用は全てこの版から行い, 本文中に章とページ数を示す。
- 4) この場面の儀式としての意味合いについては、Gilbert and Gubar 271-74に詳しい。
- 5) Charlotte Brontë 102.
- 6) 楽園喪失のモチーフについては論者によって扱い方が異なるが, Gilbert and Gubarにおいては論の中心をなす。その解釈には多くの点で賛同するが, 解釈の根幹にある女と自然と“hell”を同質のものと見做す点については見解を異にする (Gilbert and Gubar 248-308参照)。
- 7) Q. D. Leavis 99参照。
- 8) Kermode 121-125参照。
- 9) Pykett 76-77参照。
- 10) Van Ghent 155, Kermode 124参照。意味の不確定性を強調しつつ理性と秩序の復権、幽霊の否定という読み方をするKermodeはLockwoodと共犯関係にあるとJacobsは指摘する(Jacobs 65-67)。
- 11) Hardy 101, Gilbert and Gubar 305, Armstrong 396, Conger 411-412参照。

Works Cited

- Allott, Miriam, ed. *The Brontës: The Critical Heritage*. London and Boston: Routledge, 1974.
- Armstrong, Nancy. “Emily Brontë In and Out of Her Time.” *Genre* 15.3 (Fall 1982): 243-64. Rpt. in McNeese 382-400.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Ed. Richard J. Dunn, 2nd ed. New York: Norton, 1987.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. Ed. William M. Sale, Jr. and Richard J. Dunn, 3rd ed. New York: Norton, 1990.
- Cecil, David. “Emily Brontë and *Wuthering Heights*.” *Early Victorian Novelists: Essays in Reevaluation*. New York: Bobbs-Merrill, 1935: 157-203. Rpt. in McNeese 102-126.
- Conger, Syndy Mcmillen. “The Reconstruction of the Gothic Feminine Ideal in Emily Brontë’s *Wuthering Heights*.” *The Female Gothic*. ed. Juliann E. Fleenor, Montreal: Eden Press, 1983: 91-106. Rpt. in McNeese 401-417.
- Gilbert, Sandra M., and Susan Gubar. *The Mad Woman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven and London: Yale UP, 1979.

不幸なシンデレラ

- Hardy, Barbara. *Forms of Feeling in Victorian Fiction*. London : Peter Owen, 1985.
- Jacobs, Carol. *Uncontainable Romanticism : Shelley, Brontë, Kleist*. Baltimore and London : The Johns Hopkins UP, 1989.
- Kermode, Frank. *The Classic : Literary Images of Permanence and Change*. Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 1983.
- Leavis, Q. D. "A Fresh Approach to *Wuthering Heights*." F.R.Leavis and Q.D.Leavis, *Lectures in America*. London : Chatto and Windus, 1969 : 83-138.
- McNees, Eleanor, ed. *The Brontë Sisters : Critical Assessments* vol. II. Mountfield : Helm Information, 1996.
- Pykett, Lyn. *Emily Brontë*. Women Writers Ser. London : Macmillan, 1989.
- Van Ghent, Dorothy. *The English Novel: Form and Function*. 1953. New York : Harper, 1961.

(1999年8月31日受理)
(のぐち ゆうこ 文学部助教授)